「証人としてのキリスト者」（ルカ二四章三六～五三節）

1　復活者の顕現

イエスの十字架の死、埋葬、それから三日目の甦り、そして復活の主の顕現（復活者イエスがご自身を現すこと）と辿ってきて、今日私どもはルカによる福音書の終わりの部分を読んでいます。

今日の箇所は大きく三つのことから構成されています。はじめに、復活の主の顕現です。これは直前の箇所のつづきです。前回のエマオ途上では、イエスは二人の弟子に現れたのですが、今日は、その二人も含めて弟子たちが皆集まっているところに現れています。次に、その弟子たちに、宣教の使命が与えられたことです。そして最後に、イエスが天に上げられた場面です。場所は「ベタニアの辺り」とあります。オリーブ山です（使徒一・一二）。

ただ、皆さんもそうお感じになられると思いますが、ドラマか何かで「つづく」とあるような終わり方です。実際、そうなのです。つづきます。どこにつづくかというと、いうまでもなく使徒言行録です。その著者もルカです。彼は福音書を第一巻として、使徒言行録を、そのいわば第二巻として書いた。ルカは、神の救いが広がっていく、伸びていくそのさまを二巻に分けて、雄大な構想のもとに描くのです。私どもがいま見ている、読んでいるのはその一場面にすぎません。しかし大切な一場面、イエスから教会へとその働きが引き継がれ、救いの歴史がつづいていく、決定的に重要な一場面なのです。

はじめにイエスの復活顕現（三六～四三節）です。

先ほど、今日のこの箇所は、前回のエマオ途上のイエスの顕現のつづきだと申し上げました。思い出していただきたいのは、エマオの二人の弟子、途中加わった人がイエスだと分かって、分かったとたんにその姿は見えなくなったのですが、すぐに都に引き返したことです（三三節）。エルサレムに引き返して二人は集まっていた十一人の使徒と仲間たちに、エマオへ行くとき体験したことを話します。そのときエルサレムの彼らも、イエスはペトロにも現れた、本当に主は復活なさったと語り合っていたというのです。こうしたことが、今日の箇所のはじめの「こういうことを話していると」（三六節）の意味です。

いつのまにかイエスは彼らの中心に立っていました。ヨハネによる福音書には、彼らはユダヤ人を恐れて家の戸に鍵をかけていたとあります（二〇・一九）。入り口から入ってきたわけではありません。亡霊を見ていると思ったというのも、無理はないのです。

しかしその「亡霊」がイエスだと彼らが気づいたのは、何よりも、イエスの挨拶だったのではないかと私は思っています。「あなたがたに平和があるように」というのは、文字通りの訳ですが、もとの言葉はシャローム、ふだんから使われていた挨拶の言葉です。

その挨拶で分かったのではないかというのは、あのエマオの弟子たちが分かったのも、イエスが「パンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった」そのしぐさでしたし、あるいはヨハネによる福音書にある、復活のイエスの命令で漁をす

るペトロ、あのときも大漁で網を引き上げられず、そのときペトロはイエスだと気がついています（二一章）。どちらも生前のイエスがそこに重なって見えたのだと思います。ここでは、シャロームという声もふくめて、イエスの挨拶で、弟子たちはイエスだと悟ったのです。

それでも弟子たちは恐れおののき、うろたえ、十字架につけられイエスとは信じられず、まだ疑っていました。イエスはそれに応えて二つのことを弟子たちの前でしています。一つは、自分の手と足を見せ、その傷跡に触らせるということ（三八～四〇節）、もう一つは、目の前で食べてみせるということです（四一～四三節）。この二つ目のことはこう書いてあります。

彼らが喜びのあまりまだ信じられず、不思議がっているので、イエスは、「ここに何か食べ物があるか」と言われた。そこで、焼いた魚を一切れ出すと、イエスはそれを取って、彼らの前で食べられた（四一～四三節）。

「喜びのあまりまだ信じられず」というのは面白い表現ですが、イエスが魚を食べている場面は、むしろ不思議な場面です。あまりに古い本ですが、記憶に残っているので申し上げますと、昔よく読まれていたキリスト教作家の椎名麟三（1911-73）はここでのイエスについてこう書いています。

全く、あの復活したイエスが、生きているという事実を信じさせようとして、真剣な顔で焼き魚をムシャムシャ食べて見せている姿は、実に滑稽である。だがその私にとっては、そのイエスにイエスの深い愛を感ずると同時に、神のユーモアを感ぜずにはおられなかったのである（『私の聖書物語』中公文庫、九一頁）。

まさにこの感想の通りです。あり得ないことが起こった。人間的な常識ではお手上げです。非常識。もう笑わざるをえない。でもここに神の可能性があるのです。それが本当だったらいいな、ではなくて、本当のことなのです。この神の可能性、それを人生の土台として歩むことが人に許されている。それをこの信仰者である文学者は教えているように思います。

2　証人として

さて復活者イエスの顕現に少し時間を取り過ぎたようです。次に行きます。イエスがいまご自分の復活を、いわば物理的な、身体的な方面から、証明しようとしたのに対して、イエスはご自分の復活の意味を、神の救いの広がりという点から、さらに明らかにしています。

イエスは言われた。「わたしについてモーセの律法と預言者の書と詩編に書いてある事柄は、必ずすべて実現する。これこそ、まだあなたがたと一緒にいたころ、言っておいたことである」。そしてイエスは、聖書を悟らせるために彼らの心の目を開いて、言われた。「次のように書いてある。『メシアは苦しみを受け、三

日目に死者の中から復活する。また、罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる』と。エルサレムから始めて、あなたがたはこれらのことの証人となる。わたしは、父が約束されたものをあなたがたに送る。高い所からの力に覆われるまでは、都にとどまっていなさい」（四四～四九節）。

このイエスの言葉の後半（四七節以下）を、主として取り上げます。前半は、すでにエマオ途上でも、あの二人の弟子に、モーセと預言者からはじめて聖書全体にわたり、ご自分について書かれていることを説明されたとありました。それをここでもなさったということです。

さて後半です。イエスは目の前の弟子たちを、主の証人として立て、任命し、派遣します。

そもそものことを思い出したいと思います。そもそものこととはイエスが郷里ガリラヤで宣教に立たれたときです。彼が最初に、マルコによる福音書では本当に一番最初にしたことは、弟子を招くということでした（一・一六）。その最初の弟子が、ペトロとその兄弟アンデレ、ヤコブとヨハネの兄弟、この四人の漁師だったことは、ご存じの通りです。イエスははじめから宣教の働きに人間が参与することを求め許しているのです。

彼らは、この数年のあいだ、イエスに従い、いつも一緒にいる（八・一、二二・二八、三三他）なかで鍛えられたといってもいいと思います。もちろん彼らがイエスをメシアと告白しながら、十字架のことが分からず、結局裏切ってしまう、見捨ててしまった、そういうことを私どもは知っています。それでもイエスはいま、この選ばれた弟子たちに期待をかけることを止めません。証人として立て、彼らを全世界へと派遣するのです。

証人として遣わされる使徒たち、これこそまさに教会といってもよいのですが、教会は何を証しするのでしょうか。

それは「罪の赦しを得させる悔い改め」です。イエスの十字架と復活によって人の罪はゆるされたということです。イエスがその死によって私どもの罪の罰を自らに引き受け、あがなってくださった、代わって私どもにご自分の命、神の命を与えてくださったということです。そのことを大切なこととして、人生の方向転換をなすことです。悔い改めて新しい自分を歩むことです。これこそが、全世界で、聖霊に力において宣べ伝えられ、証しされるべきことです。

3　イエスの昇天と教会

今日の箇所の最後、三番目のことに行きたいと思います。イエスが天に上げられたことです。

イエスは、そこから彼らをベタニアの辺りまで連れて行き、手を上げて祝福された。そして、祝福しながら彼らを離れ、天に上げられた。彼らはイエスを伏し拝んだ後、大喜びでエルサレムに帰り、絶えず神殿の境内にいて、神をほめたたえ

ていた（五〇～五三節）。

ここでルカによる福音書は、イエスは天に上げられた、むろん神によって、と受け身で表現しています（フィリピ二・九）。これに対して例えば使徒信条などでは、「天に昇り」と能動形で言い表されています。どちらにしてもイエスは、この地上の生涯を終えたのです。「四十日」（使徒一・三）にわたる復活顕現の期間も終わって、地上を完全に離れ、住まいを天に移した、イエスはいま天におられる、これが私どもの信仰です。

興味深いのは、イエスを見送った後、弟子たちが、いつまでも天を見上げ、天を見つめていなかったということです（使徒一・一一）。

むしろ彼らはイエスを見送ってから「伏し拝み」ます。これまで弟子たちが伏し拝んだということはなかったと思います。イエスは、いま主として、神として、彼らによって礼拝と祈りがささげられます。

弟子たちは、「大喜びで」エルサレムに帰ります。先ほど復活のイエスの顕現に接したときも、彼らは喜びました。しかしなお疑いが、そこにはくっついていました。いまそれはありません。大きな喜びをもって、イエスが指示したように、エルサレムに帰って、「高い所からの力に覆われるまで、都にとどまっていなさい」という言葉に従ったのです。いうまでもなく、使徒言行録二章に書いてある聖霊降臨の時を指しています。

ところでこの箇所には、天に上げられたイエスが「またおいでになる」というような言葉はありません。使徒言行録で補えば、イエスはそのこともこの機会に約束したはずです。それまでの間を、彼らは証人として歩むのです。

イエスの昇天に対応するのは、使徒たちのこの世への派遣です。彼らは「イエスの名」において、「あらゆる国の人々に」福音を宣べ伝えます。教会による宣教、伝道の時代が来たのです。この間の事情を、最後に、ペトロの手紙二、三章一二節（四三九頁）を取り上げ、少し申し上げておきたいと思います。

神の日の来るのを待ち望み、また、それが来るのを早めるようにすべきです。

「神の日」、イエスが裁き主として到来する日、それはまた救いの日です。ふつう私どもはそれを待ち望みます。しかしこの聖句では、それだけでなく来るのを「早めるように」すべきだともいっています。

どういうことでしょうか、同じ箇所に、いまのこの時代は、私どもが一人も滅びないで悔い改めるように神が忍耐している時だともあります（同九節）。この神の忍耐のとき、私どもは、一人も滅びることのないよう、救いを宣べ伝えるために遣わされます。待っているだけでなく、急ぎます。つまり教会は、聖霊の力において宣教し伝道し、神の国の早く来ることに仕えます。

こうして私ども教会は、復活のイエスの委託を受けた弟子たちの働きを、ここで更に引き継いでいくのです。

（二〇二一・四・一一）